成城学校と中国人留学生についての一考察

宮　城　由美子

〔抄　録〕

中国（清朝）では、日清戦争の敗北を契機に、湖広総督張之洞ら洋務派官僚たちは教育改革と人材の育成を急務と考え、躍進著しい日本に留学生や教育視察団を派遣した。一方、日本では、大陸政策を背景に陸軍参謀次長川上操六は、成城学校に留学生部を創設して中国人留学生の受け入れを図った。本論では、士官予備学校である成城学校の歴史と性格、中国人留学生を受け入れた背景、成城学校に学んだ中国人留学生たちの学校生活や、そこでの軍事教育などについて明らかにする。

キーワード　成城学校、川上操六、張之洞、中国人留学生、教育視察団

はじめに

中国（清朝）が日清戦争の敗北を契機に、祖国の分割と滅亡の危機を憂える人々（変法派）は、あらたな政治運動を展開し始めた。一般に変法運動と呼ばれる。彼らは祖国の再成を明治日本をモデルとして、その要点を教育と人材の育成に求めた(1)。そうした中で1898年４月、湖広総督張之洞は『勧学篇』を著し、日本留学を提唱した。彼は、日本の学校で軍事的教育が行われていることに強い関心を示し、将校の育成を目指す兵式教育の必要性を説き(2)、中国各省から武備学生を選抜して日本へ派遣することとした。この武備学生たちを数多く受け入れたのが、清国駐日公使楊枢が高く評価していた(3)成城学校であった。

成城学校についての先行研究には、実藤恵秀『増補　中国人日本留学史』、中村義「成城学校と中国人留学生」、尚大鵬「明治後期における中国人留学生に対する軍事教育、―日本体育会を中心として―」などがある(4)。実藤氏は、成城学校の通史を簡単に紹介し、中村氏は、成城学校の留学生部発足以来の５年間を、現存する史料の紹介とともに軍人養成予備教育の一端を考察し、尚氏は、日本体育会における、成城学校中国人留学生の射撃訓練について触れられた。しかし、これらの先行研究では成城学校の歴史や性格、中国人留学生の軍人予備教育の内容、彼らに与えた思想的影響などについて、十分に明らかにされていない。

本論では、それらを含め清朝の留日学生派遣政策と教育視察団、そして中国人留学生が成城学校から学んだものなどについて考察する。

1．成城学校の歴史

成城学校は日高藤吉郎[5]が1885年１月15日、東京市京橋区築地（現東京都中央区築地）３丁目11番地に文武講習館として設置したことに始まり、設立の趣旨は「修身学、独逸語学、漢文学並ニ体操ヲ教授シ専ラ道徳知識体力ヲ養ヒ以テ有為ノ士ヲ養成シ国家ノ隆盛ヲ謀ル」であった[6]。当時の日本は、国体の整備をはかり、欧米列強と同等の地位を目指していた時期でもあり、日高は文武両全の人材育成として、軍人予備教育が重要だと考えていた。「文武講習館規則」第１条で歩兵操練科を置くことを明記し、「歩兵操練科規則」第１条には、学業の余暇に武道を修めることを規定して[7]、文武講習館が陸軍武学生教育を主体として設置されたことがわかる。

1886年８月に、「国家を守り、国家を興隆させる男子」を養成するということから「成城学校」と校名を改めた[8]。当時、東京で陸軍士官学校の受験を目的としていた学校には、成城学校・温知塾（麹町区３番町）・有斐学校（本郷区西片町）の３校であったが、陸軍と繋がりのある学校が確実に１つ欲しいという士官学校の意向で、これらは成城学校に統合された[9]。

成城学校は軍事教育を目的として創立された学校の性格上、創設者日高藤吉郎を筆頭に、明治期の校長は軍人の就任が多く、川上操六や児玉源太郎という陸軍を代表する人物の就任によって、成城学校の陸軍予備学校の性格は更に強まった[10]。1889年11月、陸軍参謀次長川上操六が校長に就任したことを契機に、1890年２月、東京都牛込区原町にある現校地が宮内省から下賜され、更に30年間に亘って毎年下賜金と称する補助金が出されるようになった[11]。川上は他にも麹町区千代田町１番地の陸軍大学、陸地測量部修技所の建物を譲渡させた。成城学校は、宮内省と陸軍から手厚い保護を受けると共に、1898年に中国人留学生部[12]を創設した。まさに川上の校長就任が成城学校を構築したともいえる。

成城学校の士官予備学校としての特徴は、外国語科と体操科の教員の配置や授業内容から垣間見ることができる。外国語科（英・仏・独）の中で、フランス語とドイツ語は選択制であった。だが当時の陸軍が軍事政策上重視していた外国語が、ドイツ語とフランス語であったことと関連して、外国語科は「外国語学班」という特殊学級を編成し、３カ国語を教授した。そのため尋常中学科教員45名中、外国語科教員18名は陸軍から嘱託教員として、教授４名と助教授７名が派遣されていた[13]。

体操科教員５名は全員、兵式体操科教員免許状を有していた。兵式体操科教員とは、陸軍教導団歩兵科を卒業した者のことである[14]。諸学校令で兵式体操授業が各学校に義務づけられ、尋常中学校１－３年生は普通体操週３回、４－５年生は兵式体操週５回であった[15]。士官予備学校である成城学校では、全学年で兵式体操週３～５回の授業があった他に、５年生で銃剣術が課せられた[16]。

1898年８月２日、成城学校は文部省訓令第５号により尋常中学科として認可された[17]。

明治期における成城学校は、語学教育や兵式体操授業の重視と軍人が歴代校長に就任するな

ど、陸軍と緊密な関わりが特徴であった。それは「私立学校生徒数府県別多寡一覧」（1890年）で「士官予備」と科別されたことや、1896年８月20日の『東京日日新聞』に「士官学校予備」として「成城学校その他の私立学校」と記された[18]ことなどからも明らかで、成城学校はまさに陸軍予備教育の学校として認識され、展開していった。

２．成城学校中国人留学生部

（１）川上操六と中国人留学生部

日清戦争後、陸軍参謀次長川上操六は中国の国力回復と日中友好を急務として中国人留学生の受け入れを決定し、陸軍参謀本部は、清国学生管理委員会を設置した。成城学校は、管理委員会の委託によって1898年７月より留学生教育を行うことになった[19]。その背景として徳富蘇峰が、

> 川上は初めから露西亜に対するには、先ず支那と親しまねばならぬことを考へ、戦争最中から如何にして支那と親和すべきかに、それぞれ手段を講じてゐた[20]。

と語っているように、大陸政策が大きく関わっていた。日清戦争後、三国干渉をへて列強による中国分轄が一層進展し、ロシアは東清鉄道敷設権や旅順・大連の租借権を獲得し、さらに朝鮮に対しても狙いをつけていた。日本は朝鮮半島の植民地化政策を推進していて、ロシアの南下を阻止するためには、中国を味方に引き入れる必要があった。しかし日清戦争後、清国政府は直隷総督兼北洋大臣李鴻章を中心に親露派が外交を掌握していた。そのため川上は、地方の督撫たちとの関係を持とうと図った。

1897年11月末、川上は陸軍参謀部員神尾光臣を武昌へ派遣して、湖広総督張之洞に武備学生を日本へ留学させることを提案しようとしたが、張之洞は堤防工事視察のために不在であった。そこで神尾は、代わりに江漢関道及び知府銭恂と面談して、欧米列強の脅威によって中国と日本は危機的状況にあり、同種同文同教の日中両国が連携することを要望するとの、川上の言葉を伝えた[21]。

翌1898年１月初旬、川上は参謀部員宇都宮太郎を張之洞のもとへ派遣した。宇都宮は張之洞に、日中両国の連携と軍事力強化が最も重要であり、日本への中国人武備留学生派遣は日中両国が地理的に近く費用が省けることや、留学生を優待し熱心に教育することなどについてを語った[22]。このように川上操六は、中国と積極的な関係改善を図り、留学生の派遣を中国側に提案したのである。

留学生派遣の提案は軍部以外に、政府や民間も関わっていた[23]。日清戦争後、長江流域への進出を図っていた日本は、1896年外務次官小村寿太郎を中心に、対中政策の新局面を開く計画案を練っていた。それは湖広総督張之洞や両江総督劉坤一ら中国の有力者を説得し、日本人の顧問を採用することや、日本へ留学生を派遣して学習させることを要請し、日中関係の絆をよ

り強固なものにしようとするものであった[24]。

1896年５月４日から翌1897年１月にかけて大陸浪人宗方小太郎[25]は、張之洞や劉坤一らが設立した武備学堂に関する報告書を、日本政府へ何度も提出した[26]。この報告書は、ロシアの東三省進出、イギリスによる長江水域の各省の利権独占などによって、中国は分轄されようとしていて、日本の大陸進出に影響を及ぼす恐れがあり「国家百年の計」も躓き兼ねないとの懸念を表明するとともに、福建省と浙江省の２省を他の欧米列強へ譲渡しないとの約束を中国から取り付けることを提案し、一方では湖広総督張之洞ら地方の高官との親善外交を進めることを建議したものである[27]。

1898年６月に第３次伊藤内閣が倒れた後、９月から10月にかけて伊藤博文は中国を訪れた。その目的はロシアの中国進出を押さえると共に、中国に対して日本の政治的影響を強化するためであった。ときに伊藤が北京滞在していた９月21日、戊戌のクーデターが発生した。10月13日に伊藤が漢口で張之洞と会談したおり、伊藤は張之洞に変法による急激な改革に反対を表明していた[28]。また伊藤は、中国の動向は東亜の存亡に関わることがゆえに、中国問題の根本的な解決を図るためには日本へ学生を派遣して、軍事を学ばせる以外にないことを提案した。張之洞は後日、小田切上海総領事に託した書簡の中で伊藤とアジアの大局を論じ合い、その規範となる彼の卓識に啓発され、この危機を乗り越えるためにも日本へ武備学生を派遣することを決定した、と記している[29]。

張之洞は、軍備の近代化として、当時世界最強といわれたドイツの軍隊制度導入を考慮していたが、1897年11月ドイツは、ドイツ人宣教師殺害を口実に山東省膠州湾の租借権を要求し、導入計画は暗礁に乗り上げていた。そのような時ドイツの陸軍制度を模範としていた日本からの申し出は、張之洞にとってドイツ式軍隊制度を学ぶ絶好の機会であった[30]。また日英同盟の実現は、張之洞にとっても重要なことであった。1898年３月、旅順の租借が決定したロシアや膠州湾を占拠したドイツと同じように、イギリスが中国の分轄に乗り出せば、長江流域各省が割譲される恐れがあった。切迫した状況の下、１月初旬に川上操六から派遣された参謀部員宇都宮太郎は、日本が既にイギリスと聯盟していることを伝え、中国の危機を救う最善策は聯英であると述べたのである。張之洞は日本との関係を改善して、イギリスに対する仲介役になってもらうことこそが、中国を分轄の危機から救う道だと考えた[31]。日本政府や軍部からの積極的な説得工作は功を奏し、その結果として張之洞は日本へ武備学生の派遣を決定することに至ったのである。

1899年４月、参謀総長川上操六は長江流域各省の督撫と更なる関係の強化を図るため、福島安正大佐を両江総督劉坤一と、湖広総督張之洞のもとへ派遣した。

４月９日、劉坤一は福島との会談で、欧米列強による分轄の危機において、中国目下の急務は精兵養成にあると語った。これを受けて福島は、前年に成城学校へ初めて入学した陸軍派遣武備学生４名が、僅か９ヶ月間で日本文が読めるようになり、地理・歴史・物理・化学・算術等の科目と共に、成績の向上と進歩状況が目覚ましいことを報告した[32]。また福島は、劉坤一

が今年１月20日、既に成城学校へ14名の武備学生を、日華学堂へ文科生７名を入学させるなど[33]、人材育成に力を入れていることを評価した。同日成城学校へ入学した湖北や南洋からの派遣留学生33名のうち、両湖書院出身の９名は秀才の資格があり、他の武備学生も含め日本語や英語に通じ、科学の素養もあり、昨年入学した４名の留学生よりも、その進歩は速いであろうと述べた。その理由を、日中両国が同文同種によるもので、日本の近代文明が明治維新以後30年で成し遂げたものを、中国はその半分の15年で成就することも不可能ではないと語った[34]。福島は、中国人留学生を日本へ派遣することで、清国政府が望む西洋近代政治制度の導入と、軍事教育による人材の育成が可能であると示唆したのである。

このように日本は東三省に南下しようとしていたロシアを牽制するために、湖広や両江など長江流域の各省の督撫との友好関係を結ぼうとしたことがわかる。一方、日清戦争敗退後分割の危機に陥っていた中国は、国力回復と軍事力強化のための人材育成として、日本へ武備学生を派遣する気運が高まっていったのである。

（２）教育視察団

近代学校制度と教育の普及のために、中国各省から日本へ教育視察団が派遣されるようになった。1895～1903年の視察は、主に近代的な学校体系と、学校教育の中に組み込まれている軍事教育に関心が持たれた[35]。成城学校へも、1898年より官費や自費による教育視察団が相次いで訪問した[36]。下記の①～⑤がそれである。

①1898年３月３日、湖北自強学堂総稽察姚錫光一行の視察[37]

姚錫光一行は、２月に湖広総督張之洞の命を受けて来日し、東京で２ヶ月間滞在して、陸軍省・文部省・軍隊・陸軍士官学校・各種軍事学校などを視察した。姚は日本の各学校で体操兵操が授業に組み込まれ、生活規律全般に亘って軍隊式教育が行われていることに関心を持った。特に成城学校が体操兵操に重点のおいた授業が行われ、卒業生の殆どが陸軍士官学校を受験するなど、新式軍隊訓練を採りいれていることに注目した。

姚は帰国後、報告書「査看日本各学校大概情形手摺」（1898年５月10日）を張之洞へ提出し、学校組織と運営、教育内容、小学校・中学校・大学という学校系統の重要性を指摘した[38]。宗方小太郎は1898年５月23日付報告第35号で、姚の報告書を受けて張之洞は、湖南省と湖北省から日本へ100名の留学生を派遣することを決定し、先ず湖南省から、１人あたり１ヶ月25円の学資でもって50名の学生を派遣する[39]と、日本へ発信した。しかし張之洞は、経費の捻出が困難で未だ派遣することができないと、９月19日付で報告している[40]。

②６月17日浙江省巡撫廖寿豊派遣視察官の参観

視察官２名と共に来日した４名の中国人武備学生は、杭州領事館事務代理速水一孔の仲介で派遣された。成城学校へ同月20日入校し、７月１日より授業が開始された。彼ら４名は、成城学校に入学した最初の中国人留日学生であった[41]。

③９月20日江西省経済学堂校長鄒凌瀚一行の参観

鄒凌瀚一行は自費による視察団で、江西省に私立の経済学堂を設立するため、日本の私立学校を参考にすることが目的であった。同行教師の朱綬は視察日記『東遊紀程』で、成城学校参観の様子を次のように記した。

> 900人の生徒が在籍し、教師は45名である。指導教科は、国語・世界歴史・外国語・倫理・算術・製造・音楽・字画・農務学・動植物学・光電化熱などである。図書室・博物室・化学室・農学室・動植物学室・各種儀器・物理器具などの設備があり、生徒に利用させていた。また応接室・会議室・保健室・風呂場・体育館などの施設は広くて美しい(42)。

朱綬は成城学校の指導教科や、施設設備などから、私立学校の充実ぶりに注目した。日本の学校は官立・私立各学校ともに文部省のもとで統括され、教授内容や教科書は、文部省の審査を受けて使用されていることなどを視察して、私立学校も国の保護があって、初めて成立するものであると認識した。しかし中国では官立学校もないのに、私立学校が認められるかどうか不安であることも『東遊紀程』の中で吐露している(43)。

④10月湖北・南洋文武官一行の視察

駐天津領事鄭永昌が、北洋大臣兼直隷総督王文韶に対して、日本陸軍の軍事大演習を参観するよう要請したことに基づいて来日した一行である(44)。彼らは先に東京の各軍事学校を視察し(45)、成城学校にも来校した。その後長崎にて軍事大演習を見学した。王文韶は、この時応待した川上操六・神尾光臣・福島安正ら９名の陸軍武官たちに、謝意を表して「宝星勲章」を授け(46)、さらに翌年１月14日には、北洋大臣裕禄が勲章を授与し、成城学校校長である川上操六が第２等宝星を授与されただけでなく、同校幹事長奥山三郎、教頭岡本則録、幹事補田村松之助(47)たちにも、第３等第３宝星が授与された。先の王文韶が授与した時は、陸軍武官９名の褒章であったが、今回は軍人だけでなく、宮内省や学校関係者など授与された人数も34名に増え、勲章も格上げされた(48)。

⑤11月浙江省派遣の武官、湖北・湖南派遣の文武官の参観

湖広総督張之洞は、日本陸軍の大演習を参観するため湖北文武官を派遣した。彼らは浙江省武官２名と共に、成城学校へも参観した。彼らの中には兵制改革に反発していた者がいたが、陸軍大演習を参観して改革の必要性を認識し、張之洞に兵制改革断行を促している(49)。翌1899年４月、福島安正大佐は、両江総督劉坤一や湖広総督張之洞を訪問した折、20日に練兵体操兵舎を参観した。ドイツ式軍隊の編成を採り入れ兵式体操や器械整備、撃剣、銃槍などの技術向上は、前年の３月と11月に派遣された視察団員らが張之洞に兵制改革を促したことによる成果の表れであった(50)。

1898年以降も成城学校へ視察団が訪れた。1899年四川総督奎俊の命を受け、提督統領四川威遠後軍克勇巴図魯丁鴻臣一行が、日本の学校と練兵諸法を学ぶために派遣された(51)。８月19日に成城学校を訪れ、その模様が次のように丁の日記に記されている。

陸軍士官学校海軍兵学校の予備学校である成城学校は、兵式体操を最も重く見ている。教えの宗旨は倫理学を其の志の本源とし、体操教練はその胆力を忠君愛国につかい、危急存亡の時にあって死力を尽くし、逃げることはしない。この精神が教育の第一義である。そして知識教育が第二義である・・・前年度より入学している中国人留学生数は41名であった。年間の経費は300円で、湖北、浙江、南北洋より派遣された者が学んでいた。日文日本語をすでに８ヶ月学び、大半は体操に熟練した学校へも通っていた(52)。

「体操に熟練した学校」とは、麹町区飯田町にある日本体育会(53)のことで、狭窄射撃練習が行われた。その後1903年４月16日、袁世凱の命を受けて銀元局総弁道員周学熙が(54)、1907年には翰林院侍読呂珮芬一行が成城学校を参観した(55)。

これらの視察団は、軍隊式教育と共に、日本が教育勅語の公布による忠君愛国の国家主義的教育体制を基本としていることに注目した。中国は、国勢と国力回復のために国民全てに軍人の知識を備え、忠君愛国思想を培養するために文武を統合し、しかも道徳を兼ね備えた教育、すなわち軍国民教育(56)の実践をめざそうとしたのである。

（３）成城学校中国人留学生と学校生活

成城学校における最初の中国人留学生は、徐方謙・段蘭芳・蕭星垣・譚興沛の４名の浙江省派遣武備学生で、1898年６月20日に入校し、７月１日より授業が開始された(57)。譚は途中退学したが、他の３名は２年２ヶ月間修学した。成績が最上位であった蕭星垣は、第１回1900年７月の卒業式において、卒業生代表として答辞を述べた。

第１回と第２回卒業式は、同日に挙行された。第２回卒業生は42名で、帰国後、中国陸軍に登用された者や、辛亥革命を闘い民国成立後、政府の中核となった者を多く含んでいる。興中会の呉禄貞や傅慈祥（共に湖北省）、中国同盟会の萬廷獻（湖北省）・張紹曽（直隷省）、満州族出身の鐵良や清朝貴族良弼なども卒業生である。卒業生たちの入学時期はそれぞれ異なり、修学年月は１年３ヶ月～１年６ヶ月であった。第２回各省卒業生総代は、湖北派遣学生総代盧靜遠・南洋総代章遹駿（湖南省）・北洋総代賈賓郷（直隷省）で、各々答辞を述べた。卒業生たちは先ず近衛師団に配属され、その後陸軍士官学校へ進学した(58)。

1899年１月20日に両江総督劉坤一派遣の学生14名と、湖広総督張之洞派遣の学生19名が成城学校へ入学したのをはじめ、この年だけで79名が入校した。出身地域は直隷省を除いて、浙江・湖北・湖南・安徽・江蘇・福建・貴州・広東・四川など、長江流域を中心とした地域からの派遣学生であった。入学時の平均年齢は21歳で、最年少は許崇智（広東省）の14歳である。後に広東国民政府高官となった彼は、兄の許崇儀（19歳）と共に派遣された。最年長は石茂林（湖北省）の37歳であった(59)。

中国人留学生たちは「成城学校清国留学生部」に在籍し、寄宿舎生活を送った。当初寄宿舎は、牛込区市ヶ谷薬王寺前町32番地に臨時で設けられ、初めて入学した４名と、翌1899年１月

20日に入校した33名が入寮していたが、同年２月28日に市ヶ谷河田町に新たに設けられた寄宿舎へ移転した[60]。中国人留学生のために寄宿舎を完備していたのは、1902年段階でも成城学校・東亜同文書院・弘文学院などがあるだけであり、ほとんどの中国人留学生たちは、下宿屋や知人宅に間借りしていた[61]。

1899年10月18日、丁鴻臣と共に成城学校を訪れた侯官沈翊清は、『東遊日記』に中国人留学生の１日の生活を次のように記している。

> 起床午前五時、朝食六時、病気の者診察六時半、自習七～八時、昼食十一時五十分、入浴午後一時～七時、夕食四時半、散歩夕食後から六時半、自習六時半～七時半、就寝八時半、消灯午後九時、その間午前七時から午後二時まで授業があった。授業で特徴的なことは、一班から四班全ての班に毎日必ず体操が組み込まれていたことである。日本語習得のため、日語や日文授業も毎日行われていた[62]。

沈が注目した毎日の体操授業は、陸軍予備学校である成城学校の教育方針と、清国政府の近代軍隊組織に対応した人材育成がまさしく反映している。授業内容は、柔軟体操・器械体操の基本と歩兵教練の各個教練・分隊教練・小隊教練・銃剣術の基本、及び狭窄射撃であった。

狭窄射撃は発射時の反動を軽減するため、少量の火薬を用いた実弾射撃である。初心者や発育期の者へ射撃指導をするときに、身体的悪影響を及ばさないよう配慮した射撃方法で、日本体育会狭窄射撃場（牛込区市ヶ谷左内坂町）において練習した。狭窄射撃卒業試験は、狭窄射撃五習会と、三百ヤール実弾二習会の合計点で決まった。卒業試験は中国人と日本人との区別はなく、合計点で順位がつけられた。蕭星垣は1901年６月の卒業試験において１位の成績となり、２位は日本人で、３位～６位までは成城学校中国人留学生が占めた。射撃場練習生卒業試験合格者には、卒業証書が付与された[63]。日本体育会では射撃奨励会なども開催され、成城学校中国人留学生たちも参加し、好成績を収めた[64]。

中国（清朝）政府が新式軍隊方式の摂取と、清朝に対する忠誠心を学生に期待をしていたとはいえ、官費留学生の中には革命運動に参加し、革命後民国政府の中核として活躍する者も少なくなかった。そういう彼らにとって、兵式体操訓練や射撃訓練は、革命闘争に向けての軍事訓練であったともいえよう。

その他の学校行事では運動会、修学旅行、避暑を兼ねた夏期講習会などが実施された[65]。

成城学校春季運動会は、陸軍士官学校附属水野原練兵場（牛込区若松町）にて、日中合同で開催された。1908年５月14日に開催された運動会の器械体操競技で、中国人留学生の１等は周傳祉（湖南省）であった。中国人留学生各班対抗選手競争は、当日第１の呼び物であったと『校友会雑誌』に記されていて、第５班王傳薫（浙江省）が１等賞になり、月桂冠とゴールドメダルが与えられたという[66]。

しかし1903年４月26日に開催された運動会で、国旗をめぐる事件が起こった。運動場に掲げられた万国旗の中に中国国旗が掲げられておらず、留学生たちは学校へ激しく抗議した。学校

側は、重要な意味を持たず随意に掲げたと返答したが、留学生たちは納得せず、中国国家を辱めるものであると、運動会のボイコットを決めた。事態を重く見た学校側は、中国国旗を運動場に掲げてその場を収めようとしたが、留学生たちは会場へ現れなかった(67)。

翌1904年元旦にも、学校に掲げられた万国旗の中に中国国旗がなく、中国人留学生が授業のボイコットと、ハンガーストライキで抗議するという事件が起こった。当時の中国国旗「黄龍旗」は満州国を示し、漢民族にとって異民族支配のシンボルであり、反清革命の象徴でもあった。だが日本在住の中国人留学生たちにとって、たとえ異民族支配国家の旗とはいえ、中国国家の国旗であった。これを掲げられないことは、中国を侮辱されていることに他ならないのであり、学校側へ激しい抗議を行った(68)。

中国国旗をめぐって、先の運動会で留学生たちが激しい抗議をしたにもかかわらず、なぜ翌年の元旦にも学校側は同じ問題を起こしたのであろうか。雑誌『江蘇』が、この事件について「日本人は如何に我らを軽視しているか」(69)と記しているように、日清戦争後、戦勝国である日本が中国に対して抱いた蔑視感を、学校側も強ちなかったとは言えなくはないであろう。

このような事件があったにもかかわらず、成城学校中国人留学生たちは、中国がおかれている危機的状況を充分認識していた。そのため学校生活は、厳しい軍事教練を中心とした授業であったものの日夜勉学に励み、卒業後そのほとんどが陸軍士官学校や大学などへ進学した。清王朝を守ろうとする者、革命闘争に向かう者など、それぞれの道は違っても、帰国後の中国で活躍していく彼らにとって、成城学校での学校生活は貴重な時間であったといえよう。

3．留学生部の中断と再開

（1）成城学校中国人留学生部の委託の返上

1903年７月、成城学校は中国人留学生の受入れを中止した。「成城学校留学生部沿革」に、「明治三十六年七月、参謀本部ニ於テ振武学校設立ニ依リ、本校武学生ハ該校ニ移転シ、参謀本部ノ所管ニ帰ス」とある。『振武学校沿革誌』では、「成城学校ニ於ケル教育ノ委託ヲ解キ七月下旬該校ヨリ諸般ノ引継ヲ受ケ八月開校」と、成城学校から引き継いだことが明記されている。陸軍省所轄地内の建屋にあった成城学校留学生部校外寄宿舎は、振武学校が使用し、直接参謀本部の所轄となった(70)。

参謀本部が振武学校を設立した背景には、２つの理由があった。１つは、1902年に成城学校へ入学を希望する私費中国人留学生に対して、当時の清国公使蔡鈞が入学を拒んだ「呉孫事件」である。中国政府は呉孫事件後、軍事に限っては官費留学生のみ派遣することを決定した。

もう１つの理由は、成城学校が中国人留学生部の委託を返上したことである。成城学校中国人留学生部は、陸軍参謀本部清国留学生監理委員会の委託によって開始され、経費は学生数に関係なく１ヶ月420円が監理委員会より支給されていた。だが留学生の増加や教員への負担増な

どから、清国学生監理委員長陸軍少将福島安正へ経費増額を求めたが拒否され、学校側は留学生部委託を返上した。1898年以来、５年間で188名の卒業生を送り出した成城学校中国人留学生部は、1903年７月を以て中国人留学生教育を辞退することになった。これらの理由から陸軍参謀本部所属の振武学校が設置され、成城学校の教育課程を踏襲したのである(71)。

（２）文学班開校

成城学校が中国人留学生部の委託を返上した後、清国公使楊枢は、文科専門留学生の受け入れを成城学校へ要請してきた。学校側は開校の条件として、１班20名を示した。四川省出身15名と他省から５名、計20名が入学を希望し、同年10月20日に文学生班が開校され留学生部も再開された(72)。教育費は毎月１人25円で、修業年限は２年半とする約定を取り決めた。文学班開校後入学者数は年々増加し、1909年には修業年限が３年となり、在籍数は283名にもなった(73)。

ところが文学班開校前、すなわち留学生教育の委託を返上する前に、武備学生だけでなく文理科学生が入校していた。1901年11月９日、四川総督岑春煊によって派遣された19名は、武備学生と文理学生に区別されて入学した。文理科学生たちは、卒業試験成績表にそれまでのように「清国陸軍学生」ではなく、『第七回明治三十六（1903）年七月清国文理科学生拾四名卒業試験成績表』と明記されている。入校時期は1901年11月・12月及び、1902年３月・４月で、振武学校はまだ開校されておらず、武備学生を中心とした成城学校中国人留学生部が存続していた時期であった。文理科学生は陸軍学生の学術課程を受講するのではなく、外国語の授業が行われ、典令教範科目は開講されず、体操の授業だけであった(74)。

同時期に入校し第５回1903年３月の卒業生や、1902年に入学し第６回同年６月の卒業生たちは、武備学生として(75)陸軍学生学術課程表のカリキュラムで受講している。卒業年数も文理科学生よりも若干早く、11ヶ月から１年５ヶ月（文理科は１年３ヶ月から１年８ヶ月）で、卒業後は陸軍士官学校へ進学した。けれども文理科学生は、陸軍士官学校ではなく、全員大学などへ進学した(76)。なぜ1903年10月の文学班開校までに、士官学校進学を目的としない学生を受け入れていたのか、それを明らかにする史料が見つからず、そのいきさつについては不明であり今後更に研究する必要がある。

1911年10月10日の武昌蜂起の勃発によって、多くの中国人留学生たちが革命に参加するため帰国の途についた。成城学校でも入学者の激減と退学者が相次いだ。1912年３月の特別班９名が卒業し、残された在籍者は僅か１名となってしまい、再び中止に追い込まれた。明治期の成城学校中国人留学生部は、卒業生551名を送り出し幕を閉じることになった(77)。

中華民国成立後1912年11月12日、中国人留学生教育は再開され「成城学校中華留学生部」と、名称も変更された。この年の在籍者数は45名である(78)。1914年には、振武学校が辛亥革命で武備学生の帰国による学生数減少のために廃止され、成城学校が士官学校進学希望の留学生教育を再開することになった(79)。しかし日中関係の悪化のなかで、1934年、修業生10名を出したの

を最後に留学生部の在籍者はいなくなり、自然消滅の形で留学生部は廃止された。1945年、成城学校中華留学生部の閉鎖決議が出され(80)、財団法人日華協会と統合して、成城学校中国人留学生部は翌1946年３月31日をもって正式に閉鎖された(81)。1898年の開設以来の成城学校中国人留学生部の卒業生は、のべ1336名であった。

おわりに

明治期の成城学校の歴史的意義は、宮内省から校地や多額のお金が下賜されたことや、軍人が校長に就任したこと、複数の陸軍士官予備学生教育校を成城学校１校に統合したことなど、士官学校への進学を目的とした厳格なる軍事教育や宮内省・陸軍と強い関わりを持ったことにある。尋常中学校認可後も士官予備学校と一般的に認識され、中国からの教育視察団も「陸軍予備学校」と見ていたように、成城学校は、陸軍士官予備教育学校としての位置付けが大きかったことのである。

中国（清国）政府が奨励した中国人留日学生派遣政策は、一方では日本政府と陸軍参謀本部の大陸政策を背景に展開され、陸軍参謀次長川上操六は成城学校中国人留学生部を創設した。成城学校は中国人留学生にとって近代新式軍事教育の基礎を学び、士官学校や大学へ進学するための重要な学校であり、それを裏付けるのが教育視察団の成城学校訪問や、官費や私費による中国人留学生たちの入学であった。しかし近代軍隊制度摂取と将校育成を考えていた中国政府と、留学生たちとの間に意識の上でずれがあった。中国人留学生にとって、ある者には革命のための訓練学校であり、ある者は帰国後政府軍に入隊する手段であった、というように、それぞれの立場で違った意味を持っていたのである。

成城学校中国人留学生部は、清国政府の中枢的人物、辛亥革命や民国成立後に活躍した人物を多く輩出し、思想と言論や反清革命に大きな影響を与えるなど、中国人留日学生史の重要な位置を占めるともに、明治期における日本の軍事教育史の一端を担う学校としても注目に値する。

〔注〕

(1)　実藤恵秀『増補　中国人日本留学史』くろしお出版、1970年、33頁。

(2)　張之洞『勧学編』外篇「遊学」「兵学」光緒24年６月。

(3)　「出使日本大臣楊密陳遊学生在東情形並籌擬辦法摺」『東方雑誌』第３年第６期、光緒32年５月25日、133頁。楊枢は「中国人留学生のために設けられた日本の学校では、成城学校など３－４校が条件が整っている」と述べた。

(4)　実藤恵秀、前掲書424～460頁。中村義「成城学校と中国人留学生」辛亥革命研究会編『中国近現代

史論集』汲古書院、1985年、251～275頁。尚大鵬「明治後期における中国人留学生に対する軍事教育、―日本体育会を中心として―」『廣島東洋史学報』第７号、2002年、47～60頁。

(5) 日高藤吉郎（1856－58年～1932年）栃木県佐野市近郷で生まれる。1876年教導団に入り翌年卒業後、歩兵伍長に任官され、西南戦争に参加した。1880年７月歩兵軍曹に昇格。1884年、「将校予備教育」と「国民体育」の普及と発達に尽くすとして除隊した。翌年成城学校の前身である文武講習館を創設して以降、47年間校務に関係した。日本体育会（日本体育大学）の創立者でもある。木下秀明「日本体育会創立者日高藤吉郎」『学校法人日本体育会・日本体育大学八十年史』不昧堂、1973年12月、55～58頁。『成城学校百年』（以下『百年』と記す）校史編纂委員会、1985年11月１日、20頁。

(6) 『成城学校八十年』（以下『八十年』と記す）成城学校八十年編纂委員会、1965年10月16日、１頁。

(7) 「成城学校沿革史稿」昭和10年11月23日、『百年』255頁。

(8) 『八十年』９頁。『百年』25頁。「成城」の校名は『詩経』「大雅　蕩之什　常武六章章八句　瞻卬」にある「哲夫成城」の言葉から取って、陸軍士官学校長小沢武雄中将が命名した。東京都公文書館編『都史紀要23　東京の中等教育２』1974年２月、136頁。自由主義初等教育を標榜して創設した「成城学園」は、大正６年当時の成城学校校長沢柳政太郎が成城中学校の校舎の一部に於いて、成城小学校を始めた。「成城」の出典も全く同じである。歴史の古い「成城学校」は現在中学・高校の男子校として現存し、小学校を母体として展開した「成城学園」は、幼稚園から大学までの総合教育機関として、町名もその名に残している。

(9) 広田照幸『陸軍将校の教育社会史―立身出世と天皇制―』世織書房、1997年６月21日、10頁。『百年』24～27頁、257～259頁。温知塾は明治19年７月、有斐学校武学生予備科は明治20年９月に成城学校に統合された。

(10) 「明治期成城学校歴代校長」『八十年』１頁。『百年』20～64頁。（年月は在任期間）

１代　日高藤吉郎：18年１月～19年４月、元陸軍下士官・創設者。

２代　柳生房義　：19年４月～19年７月、陸軍大尉・「自学自習」の校風を打ち出す。学習院転出。

３代　原田一道　：19年７月～22年10月、陸軍少将・幕末の兵学者で、オランダに留学。

４代　川上操六　：22年11月～32年５月、陸軍参謀本部次長、総長を歴任・31年陸軍大将。成城学校校長就任時は陸軍少将。中国人留学生部を創始するなど、成城学校の基礎を構築した。1899年病没。

５代　奥山三郎　：32年11月～34年９月、成城学校幹事長、校長に就任。その後理事。

６代　岡本則録　：34年９月～36年６月、数学者で和算の大家。大阪師範学校長・学習院教頭・陸軍教授を歴任。成城学校教頭後、校長に就任。

７代　児玉源太郎：36年６月～39年７月、陸軍大臣・内務大臣・文部大臣を歴任。成城協会長。1906年病没。

８代　岡本則録　：39年７月～大正５年10月　児玉源太郎急逝による再任。

(11) 『八十年』14頁。毎年下賜金２千４百円が贈られることとなった。

(12) 成城学校中国人留学生部は、創設時の名称は「清国留学生部」であった。本論では、成城学校史料の引用を除き「中国人留学生部」及び「中国人留学生」と表した。

(13) 成城学校史料（以下史料と記す）『当校義陸軍補充條例ニ依リ御指定之義願再進　成城学校設立者子

爵川上操六　東京府知事子爵岡部長職殿』「一　外国語ノ教授ニ関シ特殊ノ学級ヲ編成セシハ如何ナル方法ニ由ルカ」明治31年５月11日。史料「教員名簿」『文部省訓令第五号ニ依リ御指定相成度義願』。史料「校舎器械標本其他不充分トシテ指示セラレタル事項ニ対スル上申一、日課表、授業時数、教員数ノ相違」黒田茂次郎・土舘長言編『明治学制沿革史』臨川書店、明治39年12月20日、昭和44年８月30日複製版、（以下『明治学制』と記す）221～222頁。

(14) 前掲史料「教員名簿」。『明治学制』990～991頁、1219～1220頁。石橋武彦・佐藤友久『日本の体育』不昧堂書店、昭和41年７月20日、119～120頁。

(15)『明治学制』226～227頁、325～328頁。普通体操（矯正術・徒手体操・唖鈴体操・球竿体操・棍棒体操）兵式体操（柔軟体操・各個教練・小隊、中隊教練・器械体操・号令演習）

(16)「成城学校授業科目及程度略表」『百年』44頁、264頁。

(17)『八十年』20頁。『百年』46頁。

(18)「私立学校生徒数府県別多寡一覧表」『大日本教育会雑誌』94号、明治23年、82頁。近代日本教育資料叢書史料篇１『大日本教育会雑誌』15、宣文堂書店出版部、昭和44年５月10日。『東京日日新聞』明治29年８月20日。

(19)『百年』309～310頁。

(20) 蘇峰徳富猪一郎『我が交遊録』中央公論社、昭和13年３月６日、110頁。

(21)『張文襄公全集』巻79、19～21葉、「致総署」、光緒23年12月初10日。巻154、15～16葉、「致日本参謀大佐神尾光臣」、光緒23年12月初日。

(22) 前上、巻79、19～20葉。

(23) 李廷江「日本軍顧問と張之洞、－1898～1907－」『アジア大学アジア研究所紀要』第29号、2003年３月31日、360頁。

(24) 外務省編『小村外交史』上、日本外交文書別冊、新聞月鑑社、昭和28年２月25日、103頁。

(25) 宗方小太郎（1864～1923）大陸浪人として中国で1884～1923年まで、一諜報者として中国情報を総合分析して日本へ発信した。宗方の情報・意見書は日本政府や日本海軍の中国侵略政策に重大な影響を及ぼした。馮正宝『評伝宗方小太郎－大陸浪人の歴史的役割』熊本出版文化会館、1997年、１～３頁。

(26) 李廷江、前掲書362頁。神谷正男編「発信報告第７号～報告第23号」『宗方小太郎文書』明治百年叢書241巻、原書房、昭和50年３月25日、15～27頁。

(27)「号外　明治三十一年四月十五日　於上海。列国の中国侵略と日本の進路」神谷正男編、前掲書34～35頁。馮正宝、前掲書221頁。

(28) 春畝公追頌會『伊藤博文傳』下、春畝公追頌會、昭和15年10月16日、401～402頁。

(29) 伊藤博文関係文書研究会編『伊藤博文関係文書』八、塙書房、1980年２月28日、392～393頁。

(30) 高時良編「洋務運動時期教育」『中国近代教育史資料匯編』上海教育出版社、1992年12月、509～514頁。

(31)『張文襄公全集』巻79、19～21葉、「致総署」。

(32) 太田阿山『福島将軍遺績』大空社、1997年２月24日、258～259頁。

(33) 実藤恵秀、前掲書43頁、65～66頁。日華学堂は1898年６月高楠順次郎によって本郷西片町に創立さ

れ、日本語と普通科を教授し、文科を学ぶ学生を受け入れた。外務省史料「在本邦清国留学生関係雑纂」（陸海軍外之部）３－10－５－３－２、明治32年１月７日「在上海総領事代理小田切万寿之助→外務次官都筑馨六」明治32年１月19日「外務次官都筑馨六→神戸西村方　小山大尉」など。

(34) 太田阿山、前掲書259頁。『八十年』36頁。神谷正男編、前掲書53～54頁。

(35) 汪婉『清末中国対日教育視察の研究』汲古書院、1998年12月10日、72頁。

(36)「1898年成城学校訪問の教育視察団」『八十年』、汪婉『清末中国対日教育視察の研究』、外務省外交史料館『外国官民本邦及鮮満視察雑件』「清国之部」ノ一、東京都立中央図書館実藤文庫「東遊日記」、『清光緒朝中日交渉史料』神谷正男編『宗方小太郎文書』、熊達雲『近代中国官民の日本視察』を参照。（派遣者、視察団員及身分、著作）

①（湖広総督張之洞派遣）姚錫光：湖北武備学堂兼自強学堂総督、著作『東方兵事紀略』『東瀛学校挙概』『日本学校述略』・張彪：湖北護軍統帯官・徐鈞浦：湖北槍砲場監造官・呉殿英：湖北武備学堂監操官　黎元洪：湖北護軍後営幇帯官・外１名

②（浙江省巡撫廖寿豊派遣）視察団員不明、浙江省派遣武備学生４名

③（自費）鄒凌瀚：四品銜分部行走郎中、江西省経済学堂校主・朱綬：候選塩大使、著作『東遊紀程』・周泰瀛：経済学堂英文教習・鄒邦楙：同知銜・鄒邦棨：候選塩大使・鄒邦楽：監生・武継周：湖南候補巡検・聶逢舜：廩生・武敦讓、武敦詁、黄大暹、黄大逵、鄒助邦、蕭炯、熊封楚：以上経済学堂学生

④（北洋大臣王文韶派遣）湖北・南洋文武官21名

⑤（湖広総督張之洞派遣）（湖北）張斯栒：候道・方友升：前広東南韶連総兵・祝斉賢：署督標右営遊擊・王得勝：儘先遊擊・清　瑞・方悦魯：補用知県・謝樹泉：都司・鄒正元・杜長栄：千総・他３名（湖南）：浙江省武官２名

(37) 外務省外交史料館『外国官民本邦及鮮満視察雑件（清国ノ部）』（第１巻）第三　姚錫光・張彪・黎元洪等「本邦制度視察ノ為メ湖広総督張之洞ヨリ姚錫光派遣ノ件」上海総領事代理小田切万寿之助ヨリ小村外務次官宛、明治31年２月18日。

(38) 姚錫光『東瀛学校挙概』光緒25年、東京都立中央図書館実藤文庫。（以下、実藤文庫と記す）

(39)「明治31年５月23日、報告第35号　時事雑録」神谷正男編、前掲書39頁。

(40)「第１回明治31年９月19日、学生を日本に派せんとす」神谷正男編、前掲書46頁。

(41) 在本邦清国留学生関係雑件（学生監督並視察員之部）３－10－５－３－４文書番号機密第７号明治31年５月30日「浙江省より文武留学生並に遊歴官派遣の件」在杭州領事館事務代理速水一孔→外務大臣西徳二郎。『八十年』36頁。

(42)『外国官民本邦及鮮満視察雑件（清国ノ部）』〈第１巻〉第四　鄒凌瀚・周泰瀛等「教育及工業等視ノ為本邦渡航ノ件」上海総領事館事務代理諸井六郎より小村外務次官宛公信〈明治31年８月12日〉。朱綬『東遊紀程』光緒25年、実藤文庫。

(43) 汪婉、前掲書69～70頁。

(44)「(3568) 北洋大臣王文韶来電」光緒23年10月初４日到電報擋『清光緒朝中日交渉史料』下冊、51巻、文海出版、中華民国59年12月再販、973頁。

(45)「(3724) 北洋大臣裕禄請賞給日本接待中国閲操各員宝星摺」光緒24年11月29日、『清光緒朝中日交

涉史料』下冊、52巻、1001頁。

(46)「(3579) 北洋大臣直隷総督王文韶請賞給日本武官川上操六等宝星摺」『清光緒朝中日交涉史料』下冊、51巻、975～976頁。

(47)「現旧職員」幹事・学監、『八十年』12頁。在任期間は明治21年11月～大正10年９月。史料『文部省訓令第五号ニ依リ御指定相成度義願』「教員名簿」に依れば、体操科教員田村松之助は朱書きで、「兵式体操科教員免許状ヲ有ス」とある。『校友会雑誌』の編輯兼発行者でもある。

(48)「(3724) 北洋大臣裕禄請賞給日本接待中国閲操各員宝星摺」「(3724) 附件１　日本接待中国閲操之文武各員銜明清章」『清光緒朝中日交涉史料』下冊、52巻、1001～1002頁。

(49) 神谷正男編、前掲書48頁、54頁。

(50) 太田阿山、前掲書263頁。

(51)『外国官民本邦及鮮満視察雑件（清国ノ部）』第七　丁鴻臣・沈翊清「四川省派遣調査委員出発報告ノ件」村松上海総領事事務代理ヨリ青木外相宛、明治32年９月５日。

(52) 丁鴻臣『四川派赴東瀛遊歴閲操日記上巻』光緒26年、実藤文庫。

(53) 尚大鵬、前掲書47～48頁。「日本体育会」は1891年８月11日、日高藤吉郎が牛込区において創立し、1893年４月に麹町区飯田町へ移転した。日本体育会は国民体育の普及発達と、徴兵の対象となる装丁の身体並びに精神を養成するところとした。

(54) 熊達雲『近代中国官民の日本視察』山梨学院大学社会科学研究所、1998年８月１日、114頁。

(55) 呂珮芬『東瀛参観学校記』光緒34年３月、実藤文庫。

(56) 瞿立鶴『清末教育西潮－中国教育現代化之萌芽』台湾市、国立編訳館、2002年10月、422～443頁。

(57)「成城学校留学生部沿革」『百年』247頁。「沿革」では両湖総督張之洞が陸軍内の４名の秀才を派遣したとあるが、実際には浙江巡撫派遣学生であった。また「成城学校沿革史稿第二篇　成城学校留学生部」310頁では、「両江総督劉坤一の派遣せし浙江省留学生四名」となっている。だが劉坤一が留学生派遣を開始したのは、1899年１月20日の入学からである。

(58)「成城学校卒業式」『教育時論』内外雑纂1900年９月25日、近代アジア教育史研究会『近代日本のアジア教育認識・資料編［中国の部］―明治後期教育雑誌所収中国・韓国・台湾関係記事―第10巻（中国の部２）、龍渓書舎、2002年２月20日、126頁。但しこの記事に依れば、卒業式は「９月11日午前７時より」となっているが、明治42年７月に発行された『成城学校校友会名簿』には第１回卒業式及び第２回卒業式はいずれも明治33年７月卒業となっている。また史料『清国浙江派遣陸軍学生卒業試験成績表』『清国陸軍学生卒業試験成績表』から、卒業試験の実施は明治33年７月である。史料『雑記簿』では、彼等卒業生達は明治33年９月に陸軍士官学校へ入学したとの記載がある。

(59) 史料『清国留学生原籍簿』第１号、『雑記簿』。

(60)『八十年』36頁。史料『原籍簿』第１号・第２号。第２号表紙に「清国学生寄宿舎」と表記。

(61)『教育時論』第611号「対清教育策（其五）（十）清国留学生を収容すべき予備校兼寄宿舎を設立すべし」明治35年４月５日。

(62) 沈翊清『東遊日記』光緒26年、実藤文庫。

(63) 尚大鵬、前掲書48頁。「清国学生の射撃」『体育』第72号、雑報、1899年10月、59頁。

(64)「射撃奨励会」『体育』第80号、本会記事、明治33年６月、32頁。

(65)『校友会雑誌』第１号、「雑報」成城学校校友会、明治38年３月25日、99～100頁。５月に運動会、10月に修学旅行が実施された。

(66)『校友会雑誌』第７号、成城学校校友会、明治41年７月20日、84～85頁。

(67)「(三) 成城学校運動会補懸龍旗事件」『浙江潮』第４期留学生記事、光緒29年４月20日。

(68) 呉玉章『辛亥革命』人民出版社、1961年９月、64～65頁。

(69)「記事　留学生界成城学校近事二則」『江蘇』第２期、光緒29年５月１日、23頁。

(70)「成城学校留学生部沿革」『百年』247頁。小林共明「振武学校と留日清国陸軍学生」辛亥革命研究会編『中国近現代史論集、―菊地貴晴先生追悼論集』汲古書院、1985年９月、278頁。

(71)『八十年』37～38頁。『百年』311～313頁。中村義、前掲書270頁。小林共明、前掲書278頁。

(72) 呉玉章、前掲書59～65頁。史料『清国学生ニ関スル書類』第壱号、明治36年10月。

(73)『八十年』38～40頁。

(74) 史料『清国留学生原籍簿』第１号。『明治三十六年三月清国陸軍学生十九名卒業試験成績表』『明治三十六年七月清国文理科学生十四名卒業試験成績表』。

(75) 史料『明治三十六年三月清国陸軍学生拾九名卒業試験成績表』『明治三十六年六月清国陸軍学生七拾四名卒業試験成績表』。

(76) 史料『原籍簿』第１号、『明治36年７月清国文理科学生十四名卒業試験成績表』『成城学校校友会会員名簿　留学生部』昭和10年。

(77)『八十年』39頁。

(78)『八十年』39～40頁。

(79) 小林共明、前掲書294頁。

(80) 史料『留学生部閉鎖決議及基本財産処理認可書入り』昭和20年10月20日。

(81) 史料『坂西利八郎より書記光永孝介宛書簡』「成城学校留学生部は（昭和21年）３月末を以て閉鎖のうえ、財団法人日華協会統合せらるること」坂西利八郎陸軍中将は成城学校中華留学生部協議員である。

〔付記〕

この論文を書くにあたり、成城学校と成城学校校友会事務局のご厚意により、成城学校創立以来の貴重な史料を長期間にわたって閲覧させて頂くことができた。とくに中田秀夫教頭先生や、校友会事務局の山地京子さんには、格別のご配慮を頂き、心より感謝の意を表したい。

（みやぎ　ゆみこ　　佛教大学研究員）

（指導：清水　稔　教授）

2006年10月19日受理